

平成 25 年度検定済新英語教科書の口語表現の オーセンティシティ検証と 5 つの緊急提言

小林 敏彦

要旨

本稿は、新指導要領の下で執筆され平成 25 年度 (2013) 現在使用されている、中学 1 年、2 年、3 年生および高校 1 年生用の英語の文科省検定済新英語教科書 25 冊に記載された対話文や散文の中で使用されている発話が現実の世界の口頭のコミュニケーションの場で使用されている英語と比較して、どの程度類似または乖離しているかを、語彙、統語、談話のレベルで検証したものである。分析ツールとして、小林が 2008 年に考案し、その後 2013 年に改良を加えて完成した口語英文法類型フレームワークを活用し、合計 50 ある類型項目のいずれかに該当する英文を抽出、分類した結果、50 項目中 24 の口語英文法類型のみが特定され、教科書間の差異も大きいことが明らかになった。また、検証の結果を踏まえてよりオーセンティックな語彙、構文、談話の要素を含め、学習者にオーセンティックな口語の英語表現を習う機会を確保するために、これまで教科書での記載例が皆無か一部に限定されていた項目の中から今後教科書に記載されるべき後置、左方転位などの口語英文法類型 20 項目を厳選し概説し、さらに教科書の適正化のために 5 つの緊急提言を行う。

1. 英語教科書の検証

文部科学省の検定済の小中高の教科書は、改訂される度に実証実験や論評などを通してさまざまな評価を受けてきた経緯がある。あらゆる科目の中で、

日本史や世界史の歴史、特に近代史が政治的要素も絡みマスコミで大きく取り上げられてきた経緯があり、社会の関心も非常に高い。英語に関しては、学校の英語教育の効果に関して「中高6年間英語を学んだにも拘わらず」という枕詞が常に添えられ、総じて否定的な評価を受けてきているが、検定済教科書そのものに対する批判は世間一般には聞かれることが少ない。それは、最近の中高の英語の教科書を教員やその他の教育関係者、生徒や一部の父母を除いて見たことがある人は少ないためであろう。近年の英語の教科書が昭和期のものと比較すると、サイズが大型化し、表紙やページの構成やデザインも美しく、タスクも工夫されて豊かな内容になっていることがあまり知られていない。教科書の実証研究も研究者や現場の教員に共有されても、メディアでの注目度が低く、世間一般には知られていない。

日本の社会の中で頻繁に聞かれる英語教育への批判は、教科書を狙い撃ちしたのではなく、英語が話せない日本人が多いことへの批判の受け皿として、漠然と学校の英語教育が受験を強く意識し、入学試験の形態に沿った読み書き中心の授業や教員の質などの英語教育システム全般への漠然とした批判である。数学ができなくても学校のせいにする人は少ないが、英語が話せないのを学校のせいにする人は多い。これは、英語が学校教育だけで習得されるものであると誤解されているからに他ならない。また、日本で英語が話せなくても何不自由なく暮らせ、外国の情報や知識も日本語に即時翻訳され、外国人との接触する機会も都市部を除いてごく限られているという社会的要因は考慮されず、ひたすら英語教育界が批判的になってきた。

しかし、日本国内での英語使用の社会的事情や英語と日本語の言語的相違の大きさなど英語学習を困難にする諸要因を盾にして英語教育者は責任を回避してばかりもいられない。あらゆる要因の中で、学校での英語教育がもっとも大きな影響力を持ち、その中心として国家が太鼓判を押した検定済教科書の質が本来はもっと注目されなければならない。そして、英語教師の資質がその教科書を活かす。「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」は教員の質が何よりも大切であることを示す常套句であるが、教員の資質を高め

るより、まず教科書の質を高めるほうがはるかに実に実現可能な方策であろう。

英語の教科書の特徴は、かなり以前より特定されている。教育上の配慮から掲載できる言語データの調整や制限が行われ、実際の英語の特徴とは異なることがある程度認識されている。しかし、何がどの程度異なるかについては教員間でも十分共有されていない。日常会話での使用頻度が高く、有用性があり、教育的にも適正で、オーセンティシティ（真正性）が高い語彙、構文、談話的特徴の中には、教科書で扱われたことがない項目も少なくない。外国語教育における authenticity には、表 1 にあるようにさまざま定義が与えられている。

教科書英語の特徴を Porter & Roberts (1981) は、1) intonation、2) received pronunciation (RP)、3) enunciation、4) structural repetition、5) complete sentence、6) distinct turn-taking、7) pace、8) quantity、9) attention signals、10) formality、11) limited vocabulary、12) too much intonation、13) mutilation の 13 の言語的特徴を挙げているが、1980 年代以前の英国内で出版された教科書の特徴を記述しているため、今日では該当しないものもある。例えば、5) の教科書で掲載されている英文が主語と述部

表 1 外国語教育における authenticity の定義

1	the degree to which language teaching materials have the qualities of natural speech or writing	Richards & Schmidt, 1992, p.27
2	any material which has not been specifically produced for the purposes of language teaching	Nunan, 1989, p.54
3	those which are designed for native speakers: they are real texts designed not for language students, but for the speakers of the language in question	Harmer, 1983, p.146
4	materials which were originally directed at a native-speaking audience	Wilkins, 1976, p.79
5	a stretch of real language, produced by a real speaker or writer for a real audience and designed to convey a real message of some sort	Morrow, 1977, p.3

などが揃った形態であるという点に関しては、後述の本研究からも判明したが、主部の省略（表8）の例が比較的多く見られた。

2. 新学習指導要領に記載されている英語科目の展開

平成25年（2013年）4月より新しい学習指導要領（Course of Study）下で、中学および高校で新しい英語教科書が使われ始めた。日本を取り巻く国際状況を踏まえ、日本の未来を託せる若者の育成のため、さまざまな要素が取り入れられている（中学校と高等学校の新学習指導要領の中で重要なものを付録1と付録2に抜粋記載）。

中学校の英語科目は、英語1、英語2、英語3と従来と基本的に同じ構成であるが、平成21年（2009年）に公布され平成25年度から施行された新学習指導要領の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」（p.98）には、「教材は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする」との記述があり、よりオーセンティックな英語の言語材料を盛り込もうとする意思が伺える。

一方、高校の英語の科目展開には大きな変化が起きた。表2にまとめられるように、旧カリキュラムにあったオーラルコミュニケーションⅠ、オーラルコミュニケーションⅡ、英語Ⅰ、英語Ⅱ、リーディングとライティングは、新カリキュラムでは、コミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ、英会話に変わった。平成25年（2013年）4月入学の高校1年生から新課程の科目群が適用となり、学年の進行に合わせて順次新しい教科書が発刊される。ゆえに、現時点（平成25年12月）においては、コミュニケーション英語基礎、コミュニケーション英語Ⅰ、英語表現Ⅰ、英会話の4科目の教科書のみが市販され、教室で使われている。

従来の英語Ⅰと英語Ⅱはリーディングを中心にした内容であったが、コ

表2 高校英語科目の変更一覧表

The OLD Curriculum - 2012	The NEW Curriculum 2013 -
Oral Communication I オーラルコミュニケーションI	Communication English Basic コミュニケーション英語 基礎
Oral Communication II オーラルコミュニケーションII	Communication English I コミュニケーション英語I
English I 英語I	Communication English II コミュニケーション英語II (not published yet)
English II 英語II	Communication English III コミュニケーション英語III (not published yet)
Reading リーディング	English Expression I 英語表現I
Writing ライティング	English Expression II 英語表現II (not published yet) English Conversation 英会話

コミュニケーションの重要性を強調し、従来のオーラルコミュニケーションにあたりスニングやスピーキングの要素が加味し、「4技能を総合的に育成する」(高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編、2009、p.4)とされる「コミュニケーション英語、I、II、III」に変貌した。また、英語の学力が十分でないと思われる場合に備えて、コミュニケーション英語基礎も設けられており、主に、商業高校や工業高校での使用が見込まれてはいるが、需要が低いためか、現在のところ三友社の一社からしか出版されていない。「英語表現」は、学習者が自身の考えを英語で話したり、書いて伝える技能、すなわち、発信型の英語技能を身に付けることを主眼としつつ、体系的な英文法の学習を重視した内容となっている。以上の5科目が高校卒業までの必修科目となっているが、より口頭での英語の発信技能の向上を図るために、英会話の科目が選択科目として設けられている。

3. 文科省検定済英語教科書の検証

Porter & Roberts (1981) は英語のリスニング教材に見られる言語的特徴について以下のように述べている：

Not only do ELT listening materials normally avoid the fragmentation of linguistic structures at various levels which characterizes most informal speech, but the speakers in such materials also typically express themselves in neat, simple, rather short, well formed discrete sentences, rather than in more natural sequences of loosely connected clauses. (p.177)

英語のリスニング教材は、非公式な発話の特徴である多様なレベルでの言語構造の断片化だけでなく、緩やかに結び付いた、より自然な語のつながりも避け、適切かつ単純で極めて短く、区切りが明確な朗読がされている。(筆者訳)

このような英語教材で習った学習者は、実際の英語の使用場面において、習った通りの特徴を有した英文の発話を他の話者に期待するが、実際は“practically no one does” (p.178-179) と断じている。そのため、学習者は断片的ではあるが、自然な発話を聞いても理解できないことが起きる。すなわち、堅い文章にあるような、主語と述語などのしっかりとした構造の英文は聞いて理解できるが、一部が省略されたり、会話独自の語句が加えられると、お手上げになってしまうのである。Cullen & Kuo (2007) は英国で出版された英語の教科書を数年間調査し、“common syntactic structures peculiar to conversation are either ignored or confined to advanced levels as interesting extras” (p.361) (会話特有の統語構造は軽視されているか、または上級レベルの教科書に興味深いおまけのように紹介されている程度である)と指摘している。

日本では、学習指導要領が 1947 年と 1951 年に法的拘束力のない中・高等学校試案として出され、1958 年に教育課程の基準として法的拘束力を有するに至った経緯がある。教科書の検定制度が始まる以前の状況について、井出 (2011) は明治初期に英語学習者が教科書として使っていた外国出版の文献の一部を分析・検討して日本の英語教育の原点を調べ、現在の英語教育の課題を提示している。

日本の中学校および高校の検定済英語教科書を分析した研究は膨大なものになるが、タスクや練習問題などの技能習得に関する点に着目した研究や記載されている英文の語彙、構文談話などの言語的側面に着目した研究、さらに、異文化コミュニケーションやジェンダー、描かれている題材などの非言語的側面に着目した研究が多い。以下、2000 年以降に発表された筆者が入手できた英語教科書に関する諸研究を内容と発表年代順に概説し、本研究が教科書分析の研究の歴史の中でどのような位置付けとなるかを明らかにしたい。

3-1. 中学英語教科書の先行研究

教科書に掲載されているタスクに関して、大東 (2003) は、2002 年改訂の学習指導要領に基づく New Horizon English Course 1、2、3 の英文の言語構造の複雑性とタスクの複雑性を調べ、文法シラバスを維持しつつ、機能的な要素を学習段階に応じて組み込むべきであると述べている。大澤 (2012) は、2006 年度版の中学校の 3 学年の検定済英語教科書 6 種 18 冊を対象に題材の練習問題を調査、分析、考察し、中学英語教育では、印象に残った単語や英文に下線を引かせるような、人それぞれの生き方や価値観が映し出される題材の練習問題がもっと重要であると主張している。

異文化理解に関しては、ジェンダーに着目した研究として、石川 (2004) は、高校の英語教科書に見る敬称の男女の相違を指摘し、男性には婚姻状態に関係なく一律 Mr. を使用するのに対して、女性に対しても Ms. という一律に使用できる敬称があるにも拘わらず、女性の敬称の使用頻度に著しい偏り

があり、Miss. と Mrs. という婚姻状態を示す敬称が繰り返し使用されている点を問題視している。鈴木（2005）は、特定の中学校の検定済英語教科書一冊を機能文法の枠組みで調べた結果、女性より男性の登場が多く、節のテーマ部にも男性が配され、能動的行為者として女性よりも男性が描かれることが多いことを指摘し、ジェンダー・バイアスが存在すると主張している。関連して、島田（2006）は、中学校の英語教科書で描かれる男性像に着目し、中学の英語教育が男子生徒のジェンダー観の形成にどのような影響を与えるのかを検討し、家事・育児参加などに対して男子生徒に問題意識を植え付け、考えさせ、議論させ、価値観を変えていく引き金になる題材を教科書にもっと盛り込むことを提言している。興味深い着眼であるが、その後出版された教科書が両氏の主張が反映された内容に改善されたかどうかは不明である。

同じく、異文化理解に関して、特定の文化圏が扱われる頻度に着目した研究がある。金田（2005）は、主人公、場面設定場所、国名、地名、題材の4つの観点から、1997年に使用が開始された5種15冊と2002年に使用が開始された5種15冊を数量的に分析した結果、米国を題材にしたものが他の地域と比較すると割合が大きく、英国のものが減り、日本のものが増えてきていると報告している。事実、近年の英語教科書では日本やアジアを取り上げたものの比率が高くなってきている。橘（2010）は、2005年度版の中学校の3学年の検定済英語教科書6種18冊にある初対面を設定した対話文において、日本人の登場人物が自己・他己紹介や呼びかけの際に苗字ではなく、下の名前を用いることが多い点を指摘し、日本人のアイデンティティや価値観に影響を及ぼす大きな問題であると述べている。また、印田（2012）は、異文化コミュニケーションの育成に焦点を当て、教科書の執筆者に聞き取り調査を行い、自らが以前行った教科書の分析との結果と照らし合わせた結果、執筆者の考えが必ずしも教科書の内容に反映されていない事実を明らかにした。さらに、執筆者が国際語としての英語の重要性を認識しているにも拘わらず、英語圏の英語と文化、とりわけ米国が中心に据えられており、現在の英語の使用域の現実との乖離があることを指摘し、その根本にあるものとして以下

のように述べている：

英語は、アメリカ標準英語をはじめとする英語圏のものがもっとも美しく、また英語を学ぶ以上は英語圏の文化も学ばなければいけないという、いわば明治以来の脱亜入欧的思考が社会一般に旧態依然としてあり、収益を上げることが必要な出版社も自ずとそうした需要に答えざるを得ない。(p.275)

中学校の教科書の文法的側面に関して、田川 (2008) は、英語を苦手とする日本人大学生の多くが、主語と定形一般動詞の間に本来不要な定形 be 動詞を挿入してしまう現象に着目し、その原因を英語の初学時に定形 be 動詞を日本語の「は」や「が」に相当する助詞であると誤認している可能性を指摘した。その解決策として、一般動詞を be 動詞に先行して教えることを提言し、旧課程の中学校の教科書における時制の記述について、以下の苦言を呈している：

現在の中学校の英語教育は、コミュニケーション重視の下に、少なくとも、教科書を見る限り、話す内容（つまり、名詞や述語といった内容語の提示）ほどには、英語の時制表示の仕組みを生徒たちにしっかり理解させることに重きを置いているとはいいがたい。(p.282)

Wada & Sasaki (2012) は中学校の英語教科書の談話構造、特に修辭的 (rhetorical organization) 構造の側面から New Horizon と New Crown を調べた結果、time order、opinion and reasoning、listing がよく使われている構造であることを明らかにした。Kochi (2013) は日本の中学校の英語教科書における文法教育の傾向を探るため、接触節 (contact clause) が、コミュニケーションを重視するために、関係代名詞を教える前に先行的に出現している教科書があることを例に、大部分の教科書で文法項目の提示順に改変が

起きていることを指摘している。事実、形式を重視した文法中心シラバスでは、高校の段階で仮定法の用法として解説されることが多い I'd like to などが、文法的解析をしない定型表現として中学校の英語教科書の対話文に先行的に以前から記載されている。

牛江（2013）は、2009年度版中学校英語教科書 Sunshine English Course の文法記述と語彙導入に関して、I'm や You're などの動詞句短縮が英語の入門期から一貫して使われている点に疑問を呈し、オーラルコミュニケーション偏重の影響として批判している。同様に、山田（2004）は、会話偏重と文法指導の軽視を指摘し、「いま、中学の英語教科書は行き詰っている」（p.149）と当時の教科書を批判している。さらに、江利川（2012）は会話中心の授業が英語力を低下させると批判している。これらの三氏の批判は、会話指導と文法指導の間のバランスを図ることがいかに困難であるかを示している。

3-2. 高校英語教科書の先行研究

高校の英語検定済教科書を対象に談話分析を行った研究として、岡野哲他（2000）が高校用の20冊のオーラルコミュニケーションAの各レッスンのダイアログ部における「依頼」表現に着目し、談話分析・語用論的な視点から、話し手と聞き手の対人関係の如何、依頼が当事者のどちらのために利益になるかの違いが言語表現に及ぼす影響を中心に考察を行った。筆者も関わった同研究で判明した成果は以下の3点にまとめられる：

- 1) 話者が自己の利益のために頼む、要請する、命ずる、などという言語機能の表現が大多数を占め、自己本位の依頼はするが、相手のためになるように手を尽くすという態度の表現が少なく、依頼表現全体からみると一方に偏りがある。
- 2) 場面の脈絡との関連で考察すると、丁寧さに不適切な表現が含まれる。
- 3) 対人関係・受益関係のような比較的捉え易い場面の特徴を的確に反映した表現形式を、過不足なく適切に用いているとは必ずしも言えない。

3 点目で指摘されているように、過不足なく適切に用いることは、教材としての制限から困難に思われがちであるが、A 4 サイズでイラストも豊富に散りばめられた現行の教科書には、工夫次第でまだまだ追記できる余裕はあるように思われる。究極的には、現場の教師の説明や補助教材等の配布や独自のタスクを導入することで、教科書の様々な不備が補足されるはずである。しかし、同じ教科書で学習しているにも拘わらず、教員の教え方の違いやクラスの違いで、学習者が学べる知識や身に付けられる技能に著しい差異が生じるのは好ましくない。ゆえに、学習者が独習可能なほどの解説を本文中に記述するか、教科書の出版社が発行する共通の補助教材を配布することが望ましい。そして、何よりも正確な英語の実態を反映した記述を盛り込むことが必要であり、これはすべて教科書の執筆者の資質と判断にかかっていると一言しても過言ではない。

高校の教科書の語彙に着目した研究として、安達&長谷川 (2001) は 26 冊の英語 I の教科書で使用される語彙を調べ、大学の英語授業で使う洋画作品の選択の尺度としての活用を試みた。杉浦 (2002) は、英語 I、英語 II、リーディングの全教科書の語彙リストを作成し、学習指導要領に指定されている語彙数と新語の設定方法の再検討の必要性を指摘した。中條他 (2007) は 1980 年代に使用されていた高校の英語教科書 39 シリーズ 100 冊と 2000 年代の教科書 35 シリーズ 95 冊の比較分析を行い、相違点を明らかにした。

高校の教科書の英文の内容に着目した研究として、鹿野 (2000) は英語の教科書での人種差別の扱いの特徴を調べ、米国の過去の人権や差別に関する出来事がレッスンのテーマとしてよく選ばれていることを指摘した。同様に鹿野 (2002) は英語教科書での地球環境問題の扱い方を調査し、地球市民教育の視点を取り入れることを提言した。

吉野 (2009) は旧学習指導要領が定める「言語の使用場面と働き」に関して、英語 1 のすべての教科書に言語の使用場面の具体的な場面である、1) 個人的なコミュニケーションの場面、2) グループにおけるコミュニケーションの場面、3) 多くの人を対象としたコミュニケーションの場面、4) 創造

的なコミュニケーションの場面、のすべてを一律に求めることは困難であると述べている。

また、今年度(平成25年度)から施行された新学習指導要領での英語教科書については、横山(2012)はコミュニケーション英語Ⅰの複数の教科書の特徴や執筆者などの情報を提示している。「英語Ⅰ」が「コミュニケーション英語Ⅰ」に名称が変更され、文法・訳読中心の教授法を批判し、4技能の総合的な育成を図り、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成にも資する題材や内容を選択的に取り上げ、体系立てて扱う」(文部科学省高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編、2009)という記述に基づいて作成されたクラスルーム英語、母音・子音の発音法、本文の前のリスニング活動、音読やペアワーク、グループでのスピーチなど工夫が凝らされていると報告している。さらに、全体として読む量が減ったものの、進学校用の一部の教科書は読む量を増やしているという。

3-3. 先行研究のまとめ

以上、今世紀に入ってから発表された文科省検定済中学および高校の英語教科書に関する研究を概説したが、これらの成果が徐々に学習指導要領の改訂や教科書の改善へと貢献してきたものと憶測する。昭和期の検定教科書と異なり、近年の英語教科書は、サイズも大型化し、イラストやその他の構成も学習意欲を高める工夫がなされ、文法事項も運用能力を高めるためのタスクも充実し、英米の大手出版社から出版されている教科書と比べても見かけも内容も充実している点は大いに評価すべきである。しかしながら、研究の視点が教科書に記載された英文の特定の語彙、統語、談話の現出頻度の傾向など、量的側面は着目されている一方で、それらの質的側面である掲載される英文そのもののオーセンシティに関する研究、すなわち、現実の世界で今現在使用されているものであるか否かという信憑性を本格的に検証した先行研究は少ない。

概して教科書に記載される言語表現は、英語であれ、どの外国語であれ、

手本となるべき教養を疑われることがない無難な表現に限定されるが、何を基準に教科書に掲載可能か否かを判断しているのか、掲載されている表現が日常高い頻度で使用されているのか、学習者が使用しても問題がない高使用頻度の表現をもれなく掲載しているのか、何か忘れられていたり、無視され続けている語彙、構文、談話レベルでの口語の特徴はないものかについては、これまで検証が少なかったのではなからうか。よって、その手始めとして、新課程の英語教科書に掲載されている口語表現を摘出、分析し、現実の生の英語との符号性と乖離性を検証する必要を切に感じるに至った。

4. 平成25年度検定済新英語教科書のオーセンティシティ検証

4-1. 検証対象

筆者がデータ収集時に入手可能であった文科省の検定済平成25年度用英語教科書7種15冊(中学3種12冊、高校4種13冊)に記載されている対話文、独話文、および散文中にある会話部分の英文を抽出し検証した。教科書名、科目名、出版社名を表3(中学用)と表4(高校用)にまとめた。全25冊の教科書の表紙は付録3に画像を収めた。

4-2. 分析法

口語表現の含有の有無の特定のために、筆者が2008年に考案し、2013年に改良を加え完成させた「縮小」「拡張」「変換」の三本柱からなる口語英文法類型フレームワーク(CEG Typology Framework)を談話分析ツールとして使用した(表5)。口語英文法とは、文語、すなわち書き言葉の文法規則を体系化した伝統文法に対して、口語、すなわち話し言葉の語彙、構文、談話のレベルの規則性を体系化したものである。文語と比較すると、口語の特徴として、先行研究をまとめると、共有性、即興性、双方性、社会性、日常性の5つの性質を有し、口語英文法は「lexicogrammatical and discourse features peculiar to casual conversation and writing, i.e. messages transmit-

表3 中学校検定済新英語教科書3種12冊

	教科書	科目	出版社
1	SUNSHINE English Course 1	英語1	開隆堂
2	ONE WORLD English Course 1	英語1	教育出版
3	NEW HORIZON English Course 1	英語1	東京書籍
4	NEW CROWN English Series 1	英語1	三省堂
5	SUNSHINE English Course 2	英語2	開隆堂
6	ONE WORLD English Course 2	英語2	教育出版
7	NEW HORIZON English Course 2	英語2	東京書籍
8	NEW CROWN English Series 2	英語2	三省堂
9	SUNSHINE English Course 3	英語3	開隆堂
10	ONE WORLD English Course 3	英語3	教育出版
11	NEW HORIZON English Course 3	英語3	東京書籍
12	NEW CROWN English Series 3	英語3	三省堂

表4 高校検定済新英語教科書4種13冊

	教科書	科目	出版社
1	JOYFUL Communication English Basic	コミュニケーション英語1	三友社
2	CROWN English Communication I	コミュニケーション英語1	三省堂
3	MY WAY English Communication I	コミュニケーション英語1	三省堂
4	VISTA English Communication I	コミュニケーション英語1	三省堂
5	POWER ON Communication English I	コミュニケーション英語1	東京書籍
6	PROMINENCE Communication English I	コミュニケーション英語1	東京書籍
7	ALL ABOARDS! Communication English I	コミュニケーション英語1	東京書籍
8	NEW ONE WORLD Communication I	コミュニケーション英語1	教育出版
9	CROWN English Expression I	英語表現1	三省堂
10	MY WAY English Expression 1	英語表現1	三省堂
11	NEW FAVORITE English Expression 1	英語表現1	東京書籍
12	SELECT English Conversation	英会話	三省堂
13	HELLO THERE! English Conversation	英語会話	東京書籍

ted through either spoken or written medium in spoken mode (カジュアルな会話や作文、すなわち口語調で音声または文字によって伝達されるメッセージに特有の語彙、語法、構文、談話のレベルにおける言語的形態)」と定

表 5 ロ語英文法類型フレームワーク

The CEG Typology Framework -- A Way to Give Shape to Colloquial English --					
Reduction 縮小 ● → ● W C		Expansion 拡張 ● → ● W C		Variation 変換 ● → ★ W C	
Ellipsis 省略		Attachment 付加		Substitution 代用	
Contraction 短縮		Paraphrasing 言換		Reordering 例置	
1. Greeting 挨拶 p.34	14. Abbreviations 略語 p.72	19. Attaching the Personal Pronoun 人称代名詞 p.88	26. Repetition 反復 p.116	30. Colloquialism 口語語彙 p.138	44. Topicalization 話題化 p.170
2. Fixed Expressions 定型表現 p.36	15. Nicknames 愛称 p.74	20. Attention-Getting Signals 注意喚起語句 p.90	27. Redundancy 余剰要素 p.120	31. Frequent Use of <i>get</i> <i>get</i> の多用 p.142	45. Post Positioning 後置 p.172
3. Ellipsis in Replies 返答での省略 p.40	16. Teasing Abbreviations 略式綴り p.76	21. Reaction Signals 反応語句 p.100	28. Using More Clauses 節の多用 p.124	32. Frequent Use of <i>give/got</i> の多用 p.144	46. Left Dislocation 左方転位 p.174
4. Ellipsis of Subject 主語 p.44	17. Verbal Phrase Contraction 動詞句短縮 p.78	22. Discourse Markers 談話標識 p.104	29. Communication Strategies 意思伝達方略 p.128	33. Vernacular Range of Expression 非公式表現 p.146	47. Right Dislocation 右方転位 p.176
5. Ellipsis of Copula <i>be</i> in a Command 命令での動詞 p.46	18. Coalescent Assimilation 一体化 p.80	23. Tags 付加詞 p.106		34. Vulgarism 卑語 p.148	48. Post-W/B Word Interrogative 後置疑問詞文 p.178
6. Ellipsis of <i>if</i> 接尾辞 <i>if</i> p.48		24. <i>-ve got to</i> <i>'ve got to</i> p.110		35. Progressive Form of a State Verb 知覚動詞進行形 p.150	49. Declarative Question 平叙疑問文 p.180
7. Ellipsis of Copula <i>be</i> in the Middle 文中be動詞 p.52		25. Preference for Phrasal Verbs 群動詞化 p.112		36. Past Tense for Present/Past Perfect 過去形で完了 p.152	50. Parataxis 並列結合 p.182
8. Ellipsis of <i>that</i> 接続詞 <i>that</i> p.54				37. Preference for <i>was</i> in Subjunctive Mood 仮定法の <i>was</i> p.154	
9. Ellipsis of Infinitive 不定詞 p.56				38. <i>who</i> for <i>whom</i> <i>whom</i> を <i>who</i> で代用 p.156	
10. Ellipsis of <i>-ly</i> 接尾辞 <i>-ly</i> p.58				39. Neutralizing a Personal Pronoun 代名詞中性化 p.158	
11. Ellipsis of Prepositions 前置詞 p.62				40. <i>less</i> before a Countable Noun 可数名詞 <i>less</i> p.160	
12. Ellipsis of <i>have/ had</i> 動詞 <i>have/ had</i> p.66				41. <i>like</i> for <i>as</i> <i>as</i> を <i>like</i> で代用 p.162	
13. Ellipsis at the End 文尾での省略 p.68				42. <i>more</i> before a Short Adjective <i>more</i> + 短い形容詞 p.164	
				43. Double Negation 二重否定 p.166	

義できる (小林、2008、2009、2010、2013)。

口語英文法類型フレームワークは、口語のメッセージを文字で表記してスクリプトを作成し、同一の内容を伝える文語のテキストを基準にして比較すると単語数 (形態素も含む) が少なくなる「縮小 (REDUCTION)」、多くなる「拡張 (EXPANSION)」、変化がない「変換 (VARIATION)」の三つの主要要素から成る。さらに、縮小は語句が丸ごと欠落する「省略 (Ellipsis)」と隣接する語が繋がって発音されたり、単語内の形態素が落ちる「短縮 (Contraction)」、拡張は何らかの言語的要素を加えて話者の態度や感情を表現し、聞き手への親しみや逆に反感を表したり、または丁寧さを高めるために新たな語句を加える「付加 (Attachment)」と発言の明瞭性 (clarity of meaning) と相手の理解度 (comprehension) を高めるための全体を言い換える「言換

(Paraphrasing)」、変換は語句を他の語句と入れ替える「代用(Substitution)」と語順を変えて強調などの特定の効果を出す「倒置(Reordering)」にそれぞれ下位分類される。以上のように、具体的な文法項目 50 がそれぞれの範疇に収まり、図 5 の枠組が完成する。

この枠組でまとめられる 50 の口語英文法類型項目の中でどれがどの程度の頻度で教科書に記載されているかを確認することで、それぞれの教科書が英語話者(母語話者も非母語話者も)の間で使われている口語表現の特徴を忠実に反映しているかどうか、言い換えれば、どの程度のオーセンティシティ(真正性)を有しているかを判定する一判断材料になるものと期待される。ただし、特定の口語表現が適切なコンテキストの中で使用されているかなどの用法の適性については本研究では調査の対象としていない。

4-3. 分析結果

4-3-1. 特定された口語英文法類型例

中学校教科書 7 種 25 冊で特定された口語英文法類型例は表 6 と表 7 に教科書、出版社別にまとめた。中でも特記すべき文法項目については表 8 に記載した。

中学の教科書に関して、1、2、3 年生用の教科書がそれぞれ 4 冊あるが、口語表現の量的差が著しいことが一見してわかる。いずれの学年においても、三省堂の NEW CROWN の記載の少なさが目立つ。また、2、3 年生の教科書に限れば、東京書籍の NEW HORIZON も少ない。いずれの学年でも開隆堂の SUNSHINE が著しく多く、口語表現を豊富に盛り込んでいる。

高校の教科書に関しては、選択科目である英会話に口語の表現が多く記載されている。必須科目であるコミュニケーション英語の 8 冊の教科書の中では、三友社の JOYFUL コミュニケーション英語基礎が際立って記載が多いのは、現行では唯一の基礎レベルの教科書であり、4 技能のバランス取れた学習を目指すコミュニケーション英語の中でも発話に重点が置かれており、文法事項よりも日常の挨拶などの定型表現を中心に英会話を楽しんで学習す

表 6 中学校教科書 3 種 12 冊で記載のあった口語英文法類型項目例

Textbooks	Publishers	Examples	CEG
SUNSHINE English Course 1	Kairyudo	Hello, everyone. / Hi, I'm Mike Brown. / Oh, you're Mike. / Nice to meet you. / Oh, good. / Great! / Wow! / Look. / OK. / Cool! / Sorry. / Just kidding. He's a very tall, right? / He's very clever, right? / So you brought some new flowers from your house. Right? / Fantastic! / See you soon. / See you later. / See you tomorrow. / Oh, no! / Hold on, please. / I see. / Together with you, we always had a beautiful time. / Gosh, I'm so hot!	AG Signal / Colloquialism / Ellipsis / R Signal / Tag / Topicalization /
ONE WORLD English Course 1	Kyoiku Shuppan	Hi / Nice to meet you. / _____ right? / Oh, you are? / Oh, is it? / _____ everyone? / No, no. / Huh? / Well / Great! / Oh, no! / Let me see. / Oh, thank you. / Right! / Really? / Hi, everyone. / Sounds noisy! / But still, I hate winter. / Are you kidding? / See you soon. / Wonderful!	Colloquialism / Ellipsis / Tag / Repetition / R Signal
NEW HORIZON English Course 1	Tokyo Shoseki	Hi. / Nice to meet you. / Good morning, everyone. / Oh, I see. / Really? / Wow! / Oh, no! / Well, try again. / Great! / See you then. / Bye. / OK, class. / Let's see. / Right. / Good job. / _____ right? / Huh? / Oh, no! / Come on! / Really? / Thanks. / Look! / See? / Oh, really? / Are you kidding? / Great. / What a view!	Colloquialism / Ellipsis / R Signal / DM / AG Signal
NEW CROWN English Series 1	Sanseido	Really? / Lovely. / Cool. / Good. / Thanks. / Look. / Fantastic! / Wow!	R Signal / Ellipsis / Colloquialism / AG Signal
SUNSHINE English Course 2	Kairyudo	Any volunteers? Really? / Wow, beautiful! / Oh, did you? / Guess what! / How come? / I see. / Oh, are you? / Good idea! / Oh, hi, Maki. What's up? / Great! / Bye. / See you. / Hold on, please. / I know. / That's right. / Me too. / Well, I'm afraid not. / No problem. / Oh, no. / Thanks. / That's funny. / But he is a bit strange these days. / Is that so? / For here or to go? / Let's see. / Turn left at the second light? / That's it! / Help yourself. / In the old days, we always helped each other in the country.	Ellipsis / R Signal / AG Signal / Colloquialism / DM / D Question / Topicalization
ONE WORLD English Course 2	Kyoiku Shuppan	Hi, Kenji! / Oh, sorry. / For how long? / You mean your internship? / Hey, Hiro. / Look! / Wow! / Uh / Yeah. / Really? / Why not? / Well / I get it. / Right. / Thanks for inviting me. / Ouch! / Sorry! / Thank Ms. Smith.	Colloquialism / Ellipsis / D Question / AG Signal / Reaction Signal / DM
NEW HORIZON English Course 2	Tokyo Shoseki	Well, well! / Oh, no. / Well / What's up? / Oh / Wow, that's great.	Repetition / R Signal / DM / Colloquialism / R Signal
NEW CROWN English Series 2	Sanseido	I see. / Really? / Thanks. / Well / Let's see. / Oh, no! / You bad boys! / A gghhhhhh! / Right. / Oh? / What's up? / Wow. / Look.	Colloquialism / R Signal / DM / AG Signal / Ellipsis
SUNSHINE English Course 3	Kairyudo	Hi, Yuki. / Good. / Look. / Really? / Almost. / Well done. / Good news? / Anything else? / What a waste! / Right! / In my country, we recycle many things. / Well / That's true. / Could you tell me how to get to Fukuoka Airport? / _____ right? / Wonderful. / To improve their lives, we need rescue. / John loved potatoes, so they gave him poisoned potatoes. / Oh, really? / That's great! / No problem. / Do you? / No, never. / Oh, what a cute little baby! / Very interesting! / Oh, I grew a bit after I was twenty. / Long, long ago, there lived a king in the country of Israel. / What a lucky man! / We can do more than those 3 Rs, you know.	Colloquialism / Ellipsis / AG Signal / R Signal / Topicalization / FU of give/get phrases / Tag / Parataxis / Repetition / DM
ONE WORLD English Course 3	Kyoiku Shuppan	I see. / Good for you. / Attention, please! / Ladies and gentlemen, boys and girls / No, no. / Oh, no! / My gosh! / Aaaaah... / Hi / That's Kenji! / Anything else? / Yeah, but so what. / How'd it go last night? / So!	Ellipsis / AG Signal / Repetition / Contraction
NEW HORIZON English Course 3	Tokyo Shoseki	Really? / Hello, everyone. / Hi! / Be a good boy. / Wow / uh / Oh / What's going on here? / Oh, no. / Well	R Signal / Tag / Colloquialism / DM
NEW CROWN English Series 3	Sanseido	Cool. / It's very kind of you. / Hey / Really? / Very. / Oh, dear. / Very good. Thanks, but no thanks. / It's a deal. / I see. / Right. / Well / Who knows? / Who cares?	Ellipsis / Colloquialism / AG Signal / R Signal / DM

表 7 高校の教科書 4 種 13 冊で記載のあった口語英文法類型項目例

Textbooks	Publishers	Examples	Notes
JOYFUL Communication English Basic	Sanyusha	Sorry? / You got it? / Understand? / Really? / I see. / Great! / See you again. / In other lands and across the sea, I have friends. / Look, I don't need that. / Yeah. / Good luck! / How miserable! / Wow! / We made it! / Sounds exciting! / No, no, no! / Not so hard. / Amazing! / Not really. / No kidding!	Ellipsis / Frequent Use of get / R Signal / Topicalization / AG Signal / Colloquialism / Repetition
CROWN English Communication I	Sanseido	I mean / Really? / In what way? / I see. / Well	DM / Ellipsis / R Signal
MY WAY English Communication I	Sanseido	Take a look at the pictures below. / Not yet. / What do you mean by IFT? / Does it? / That's great! / Oh. / Really? / Anyway	Phrasal Verb / Ellipsis / R Signal
VISTA English Communication I	Sanseido	Oh / Really? / Hmm. / Sounds good. / Anything to drink? / Great. / Thanks a lot. / No problem. / Hi, everyone!	R Signal / Ellipsis / Colloquialism / AG Signal
POWER ON Communication English I	Tokyo Shoseki	Do you? / Most morning, I have a raw egg on rice. / Well / OK	Ellipsis / Topicalization / DM / R Signal
PROMINENCE Communication English I	Tokyo Shoseki	Around the age of six, I enjoyed drawing things.	Topicalization
ALL ABOARD! Communication English I	Tokyo Shoseki	See you in Japan. / Hello there! / Tea or coffee? / Well / Sounds good. / Great / Really? / Oh / Oh, really? / What's up? / What? / Hey / Why not? / Hmm, hold on. / How mean! / Uh / Hello, everyone! / Wow / OK.	Colloquialism / DM / AG Signal / Ellipsis / R Signal / Tag
NEW ONE WORLD Communication I	Kyoiku Shuppan	Are you? / Well, let me see. / I see. / Well / Wow / Pardon me? / Oh / Yes, that's right. / Nothing in particular. / Good. / See you then. / Really? / Not at all. / Never get it.	Ellipsis / R Signal / Colloquialism
CROWN English Expression I	Sanseido	Ah ... / Sounds delicious!	R Signal / Ellipsis
MY WAY English Expression I	Sanseido	Oh, that's news to me. / Well	R Signal
NEW FAVORITE English Expression I	Tokyo Shoseki	Hi / Oh / Well / To me, playing the guitar is important, just like eating or sleeping. / My pleasure. / Not really. / Me, too.	Colloquialism / R Signal / DM / Topicalization / Ellipsis
SELECT English Conversation	Sanseido	Good morning, everyone. / Oh / Well / That's great. / Wow! / Hi / Yeah. / That's too bad. / Is it? / _____ right? / Umm / I see. / Sorry, not yet. / See you. / Bye. / See you soon. / Anything else? / Pardon? / Something to drink? / Very well. / Sounds good.	Tag / R Signal / DM / Colloquialism / Ellipsis
HELLO THERE! English Conversation	Tokyo Shoseki	Wow. / OK. / Really? / Sorry? / Let's see. ... / Excuse me? / What's up? / You're in a band? / How interesting! / Great! / See you then. / Thanks. / Well / I see. / No problem. / Easy to make and tastes good. / Yummy! / Look! / It sure is. / Ahah! / No wonder you feel tired. / Hang in there. / Anytime! / Pardon? / Not really. / Is that so? / Oh, um ... / Oh, no! / Great / Good luck. / That's terrific! / That sounds wonderful. / Hey, Sakura. / Thanks.	R Signal / DM / Colloquialism / D Question / Ellipsis

表8 特記すべき口語英文法類型項目例

	CEG Examples	Textbooks	
1	Regular Ellipsis in Greetings 常時省略: 挨拶 (CEG1, p.34)		
	What's up?	SHUNSHINE English Course 2 Kairyudo NEW HORIZON English Course 2 Tokyo Shoseki NEW CROWN English Series 2 Sansiedo ALL ABOARD! Communication English 1 Tokyo Shoseki HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki	
2	Regular Ellipsis in Fixed Expressions 常時省略: 定型表現 (CEG2, p.36)		
	For here or to go?	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo	
	How come?	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo	
3	Ellipsis of the Head 主部の省略 (CEG 4, p.44)		
	(Do you) See?	NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki	
	(Do you) Understand?	JOYFUL Communication English Basic Sanyusha	
	(Do you have) Good news?	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo	
	(Are there) Any volunteers?	SUNSHINE English Course 1 Kairyudo	
	(Is there) Anything else?	ONE WORLD English Course 3 Kyoiku Shuppan SELECT English Conversation Sansiedo	
	(I'm) Just kidding.	SUNSHINE English Course 1 Kairyudo	
	(I) Never got it.	ONE WORLD Communication English 1 Kyoiku Shuppan	
	Wow, (it's) beautiful!	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo	
	(It is) Easy to make and tastes good.	HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki	
	(It is) No wonder you feel tired.	HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki	
	(It is) Not so hard.	JOYFUL Communication English Basic	
	(That) Sounds noisy!	ONE WORLD English Course 1 Kyoiku Shuppan	
	(That) Sounds good.	VISTA English Communication 1 Sansiedo ALL ABOARD! Communication English 1 Tokyo Shoseki SELECT English Conversation Sansiedo	
	(That) Sounds delicious.	CROWN English Expression 1 Sansiedo	
	(That) Sounds exciting.	JOYFUL Communication English Basic	
	(You have) So many!	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo	
	(Would you like) Something to drink?	SELECT English Conversation Sansiedo	
	(Would you like) Anything to drink?	VISTA English Communication 1 Sansiedo	
	(Would you like) Tea or coffee?	ALL ABOARD! Communication English 1 Tokyo Shoseki	
	4	Ellipsis of Copula be 助動詞の省略 (CEG7, p.52)	
		You bad boys!	NEW CROWN English Series 2 Sansiedo
	5	Ellipsis of -ly 副詞語尾-lyの省略 (CEG10, p.58)	
	It sure is.	HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki	
6	Ellipsis at the End 文尾での省略(返答での省略を含む) (CEG13, p.68)		
	What a view!	NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki	
	How beautiful!	NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki	
	What a waste!	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo	
	Oh, what a cute little baby!	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo	
	What a lucky man!	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo	
	How miserable!	JOYFUL Communication English Basic Sanyusha	
	For how long?	ONE WORLD English Course 2 Kyoiku Shuppan	
	In what way?	CROWN English Communication 1 Sansiedo	
How mean!	ALL ABOARD! Communication English I Tokyo Shoseki		
How interesting!	HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki		
7	Verb Phrase Contraction 動詞句縮減 (CEG15, p.78)		
	That'll be \$3.80, please.	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo	
	How'd it go last night?	ONE WORLD English Course 3 Kyoiku Shuppan	
8	Attention-Getting Signals 注意喚起語句 (CEG20, p.90)		
	Look.	SUNSHINE English Course 2&3 Kairyudo NEW CROWN English Series 1&2 Sansiedo JOYFUL Communication English Basic HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki	
9	Reaction Signals 反応語句 (CEG21, p.100)		
	Guess what.	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo	
	Huh?	ONE WORLD English Course 1 Kyoiku Shuppan NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki	
	Gosh, I'm so hot!	SUNSHINE English Course 1 Kairyudo	
	My gosh!	ONE WORLD English Course 3 Kyoiku Shuppan	
	So what?	ONE WORLD English Course 3 Kyoiku Shuppan	
	So?	ONE WORLD English Course 3 Kyoiku Shuppan	
	No kidding!	JOYFUL Communication English Basic Sanyusha	
Are you kidding?	NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki		

10	Discourse Markers 談話標識 (CEG 22, p. 104)	
	Let me see.	ONE WORLD English Course 1 Kyoiku Shuppan NEW ONE WORLD Communication I Kyoiku Shuppan
	Let's see.	NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki SUNSHINE English Course 2 Kairyudo HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki
	Well	NEW HORIZON English Course 1, 2, 3 Tokyo Shoseki ONE WORLD English Course 1, 2 Kyoiku Shuppan SUNSHINE English Course 2, 3 Kairyudo NEW CROWN English Series 2, 3 Sansiedo CROWN English Communication I Sansiedo POWER ON Communication English I Tokyo Shoseki ALL ABOARD! Communication English I Tokyo Shoseki NEW ONE WORLD Communication I Kyoiku Shuppan MY WAY English Expression I Sansiedo NEW FAVORITE English Expression I Tokyo Shoseki SELECT English Conversation Sansiedo HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki
	I mean	CROWN: English Communication I Sansiedo
11	Tags 付加詞 (CEG23, p.106)	
	..., right?	SUNSHINE English Course 1 Kairyudo x 3 times NEW HORIZON English Course 1 Tokyo Shoseki SUNSHINE English Course 3 Kairyudo ONE WORLD English Course 1 Kyoiku Shuppan SELECT English Conversation Sansiedo
12	Repetition 反復 (CEG26, p.116)	
	No, no.	ONE WORLD English Course 1 Kyoiku Shuppan NEW HORIZON English Course 3 Tokyo Shoseki
	No, no, no!	JOYFUL Communication English Basic Sanyusha
	Well, well!	NEW HORIZON English Course 2 Tokyo Shoseki
13	Long, long ago, there lived a king in the country of Israel.	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo
	Phrasal Verb 群動詞化 (CEG25, p.112)	
14	Take a look at pictures below.	MY WAY English Communication I Sansiedo
	Colloquialism 口語語彙 (CEG30, p. 138)	
	Hey	ONE WORLD English Course 2 Kyoiku Shuppan NEW CROWN English Course 3 Sansiedo ALL ABOARD! Communication English I Tokyo Shoseki HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki
	What's up?	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo NEW HORIZON English Course 2 Tokyo Shoseki NEW CROWN English Series 2 Sansiedo ALL ABOARD! Communication English I Tokyo Shoseki HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki
	How come?	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo
	But he is a bit strange these days.	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo
	Oh, I grew a bit after I was twenty.	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo
	What's going on?	NEW HORIZON English Course 3 Tokyo Shoseki
We made it!	JOYFUL Communication English Basic Sanyusha	
15	Frequent Use of <i>get</i> <i>get</i>の多用 (CEG31, p. 142)	
	I get it. You got it?	ONE WORLD English Course 2 Kyoiku Shuppan JOYFUL Communication English Basic Sanyusha
16	Frequent Use of <i>give</i>/<i>get</i> Phrases <i>give</i>/<i>get</i>の動詞句の多用 (CEG32, p. 144)	
	Could you tell me how to get to Fukuoka Airport?	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo
17	Topicization 話題化 (CEG44, p.170)	
	Together with you, we always had a beautiful time.	SUNSHINE English Course 1 Kairyudo
	In the old days, we always helped each other in the country.	SUNSHINE English Course 2 Kairyudo
	To improve their lives, we need peace.	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo
	In other lands and across the sea, I have friends.	JOYFUL Communication English Basic Sanyusha
	Most morning, I have a raw egg on rice.	POWER ON Communication English I Tokyo Shoseki
	Around the age of six, I enjoyed drawing things.	PROMINENCE Communication English I Tokyo Shoseki
To me, playing the guitar is important, just like eating or sleeping.	NEW FAVORITE English Expression I Tokyo Shoseki	
18	Post Positioning 後置 (CEG45, p.172)	
	Well ... about fifteen minutes, I guess.	HELLO THERE! English Conversation Tokyo Shoseki
19	Parataxis 並列結合 (CEG50, p.182)	
	John loved potatoes, so they gave him poisoned potatoes.	SUNSHINE English Course 3 Kairyudo

ることに主眼を置いているためであろう。

中高の教科書で特定された口語英文法類型に該当する口語表現の中で特に、今回の新しい教科書で記載が増えたり、初めて登場した項目などを中心に CEG 類型フレームワークの番号の順に配列したのが表 8 である。以下、それぞれ特記すべき項目の中で主要なものについて分析・解説する。

英文の一部が省略され定型になっている日常会話の中の挨拶や決まり文句 (CEG1/CEG2) である *What's up?* / *For here or to go?* / *How come?* / *Good job!* などの日常の会話で非常に使用頻度の高い表現を記載している中学の教科書があることは評価できるが、全般として記載例が少ない印象を受ける。かつて筆者を含め、渡米したその日に初めて聞く学校の授業では学べない英会話フレーズの代表格であった *What's up?* に関しては、旧指導要領の下では高校の教科書にしか記載がなかったのが、今回は中学校の段階で登場し、学年は異なるが教育出版の *One World* 以外の 3 冊の教科書全部に記載されている。

返答時の省略 (CEG3) として、いまだに *Yes, I do.* や *No, I am not.* などのように文法構造を明示的に体得させるためか、省略しない形が友人同士の対話の中にできさ記載され堅苦しく聞こえる使用例もあるが、全体として *Yes.* や *No.* だけの短い返答が多い。

Do you / Is there / I / It is / That / Would you like (CEG4) などの主部の省略が非常に多いことに気づく。同様に、文尾での省略も多く、特に感嘆文での省略が多い。昭和期の教科書では、*How beautiful this flower is!* の例にあるように長い文が対話文や演習問題として使われることが多かったが、今回の調査では、より頻度の高い短い表現になっている。また一例だけであるが、文中における *be* 動詞の省略 (CEG7) も見つかった：*You bad boys!* (三省堂 *NEW CROWN English Series 2*) ただし、これは定型表現であるとも考えられる。

円滑な対話に不可欠で使用頻度の高い注意喚起語句 (CEG20) と反応語句 (CEG21) が多数の教科書で記載があったが、*Look.* と *Huh?* 以外はそれぞれ

一冊の教科書にしか記載がない。高使用頻度のフレーズである Guess what. / ___, huh? (付加詞) / So what? / No kidding! は記載が皆無である。いずれも使用頻度が高いだけでなく、教育上教えても何の問題もない無難なものである。これでは、日本語の「あのう」「えっ?」「だから?」「まさか!」などの日常会話フレーズを外国人に教えるのを避けるに等しい。ただし、エコー疑問文の一種である、A: I'm getting married. B: You're getting married? や A: What does he want? B: What does he want? (Swan, 2005, p. 467) のように相手の発言に驚いたり、確認のために相手の発言とほぼ同じ発話を上昇調で返す例が中学校の教科書でよく目立った。

談話標識 (CEG22) については、その定義や実例については研究者間でも見解が分かれるが、比較的広義な定義をする Swan (2005) の談話標識の類型 (付録 4) では、口語特有の時間稼ぎの機能を持つ let me see / well / you know の中で let me see (または、それと同義である let's see) と well の記載は複数確認 (let me see 記載 2 例 / let's see 3 例 / well 17 例) できたが、you know は皆無であった。また、同様に Swan が明確&詳細表示の機能を有する語句として分類する I mean の記載は一例だけであった。

付加詞 (CEG23) については、昭和期には、isn't it や don't you など文法的付加詞の記載しかなかったが、日常会話での使用頻度が非常に高い ____, right? が複数の教科書に付加疑問文に先行して記載されたのは大きな前進である。

口語語彙 (CEG30) については、What's up? や How come? は省略された定型である常時省略にも分類可能であるため、表 8 では二重の記載になっているが、ここで着目したいのは Hey. の使用である。昭和期では、挨拶のもっとカジュアルな言い方は Hello. のみであった。その後、Hi. が掲載されるようになり、ついに Hey! と What's up? が中学校の教科書でも解禁になったと言える。将来は、Yo. も男子の間の挨拶として対話文に記載される日が来るかも知れない。

口語英文法類型フレームワーク上の分類では、口語語彙とは別個の独立し

た項目となっている get の多用に関して、I got it. と You go it? の記載がそれぞれ 1 冊の教科書に留まっている。しかも、You got it? は三友社のコミュニケーション英語の基礎にのみ記載され、より限られた学習者にしか学習の機会が与えられていない。

話題化 (CEG44) は口語特有と言い切れないが、比較的多くの記載が確認できた。どのような時に話題化が起きるかを学習者にしっかりと理解させ、口頭での表現力を豊かにすることが大切である。

最後に一例ずつであるが、後置と並列結合が確認できた。いずれも口頭では頻発する形態であり機能的で有用性が高い統語構造であるにも拘わらず、独立した文法項目として中高の教科書で扱われることはほとんどない。今後教科書に記載されるべき項目として、詳細を後述する。

4-3-2. 記載例が皆無であった口語英文法類型例

7 種 25 冊の教科書のいずれにも記載例が皆無であった口語英文法項目が 26 項目確認された(表 9)。これらはいずれも大学入学後さらに社会人になってからも学習する機会があるかは不明であるが、実際に使われている言語表現であることには変わりはない。本研究では、7 種 25 冊の教科書全体から 24 の口語英文法類型項目しか特定されず、学習者は教室でオーセンティックな英語の形態の半分も習う機会がないことが判明した。

5. 教科書に今後記載すべき口語英文法 20 項目

本研究で記載例が皆無または 1、2 例しかなく、英語母語話者の間での使用頻度が高く、また自然で、有用性が高く、円滑なコミュニケーションと細かなニュアンスの伝達に不可欠な、教育的にも対人的にも発信しても問題が起きる心配がない、検定教科書や一般英語学習書に是非今後記載すべき 20 項目を厳選し表 10 にまとめた。

表 9 記載例が皆無であった口語英文法類型例

	CEG Features Not Found in the Junior & Senior High School Textbooks	CEG	Page
1	Ellipsis of Copula <i>be</i> in a Command 命令文での <i>be</i> 動詞の省略 e.g. (Be) Careful!	5	46
2	Ellipsis of <i>If</i> 接続詞 <i>if</i> の省略 e.g. (If) You want to get in, you pay like everybody else.	6	48
3	Ellipsis of Copula <i>be</i> in the Middle 文中 <i>be</i> 動詞の省略 e.g. You (are) sure?	7	52
4	Ellipsis of Infinitive 不定詞の省略 e.g. Go get him.	9	56
5	Ellipsis of Preposition 前置詞の省略 e.g. See you Friday.	11	62
6	Ellipsis of <i>have/had have/had</i> の省略 e.g. You better go.	12	66
7	Texting Abbreviations 略式綴り e.g. CL B4 U GO.	16	76
8	Coalescent Assimilation 一体同化 e.g. I don't wanna die.	18	80
9	Attaching the Personal Pronoun <i>you</i> e.g. Don't you say your good-bye.	19	88
10	<i>-'ve got to</i> e.g. I've got to go.	24	110
11	Redundancy 余剰要素	27	120
12	Communication Strategies 意思伝達方略 e.g. How can I get to the fish zoo?	29	128
13	Vernacular Range of Expressions 非公式表現 e.g. Doors ain't as bad as you think.	33	146
14	Vulgarism 卑語 e.g. I got a bad f--ing hangover.	34	148
15	Progressive Form of Perception Verbs 知覚動詞進行形 e.g. You were wanting to kiss me all night?	35	150
16	Past Tense for Present/Past Perfect 完了を過去形で代用 e.g. I never went back.	36	152
17	Preference for <i>was</i> in Subjunctive Mood 仮定法の <i>was</i> e.g. If I was you, I would go.	37	154
18	<i>who</i> for <i>whom</i> <i>whom</i> を <i>who</i> で代用 e.g. By who?	38	156
19	Neutralizing a Personal Pronoun 代名詞の中性化 e.g. Nobody goes to jail unless they want to.	39	158
20	<i>less</i> for <i>few</i> 可算名詞に <i>less</i> e.g. A better life with less children.	40	160
21	<i>like</i> for <i>as</i> <i>as</i> を <i>like</i> で代用 e.g. Like I said, Jack, I don't have that choice.	41	162
22	<i>more</i> before a Short Adjective <i>more</i> + 短い形容詞 e.g. She is more rich.	42	164
23	Double Negation 二重否定 e.g. I don't know nothing.	43	166
24	Left Dislocation 左方転位 e.g. All the civilizations you found, they come here?	46	174
25	Right Dislocation 右方転位 e.g. Here he comes, John Wayne.	47	176
26	Post-W/H-Word Interrogative 後置疑問詞文 e.g. You went there and ate what?	48	178

5-1. 命令文における *be* 動詞省略 (CEG5)

口語では、Careful./Quiet! など *be* 動詞の命令文で *be* が省略されて、形容詞だけを使うことが非常に多いが、今回の調査では一例も記載がなかった。命令文で *be* 動詞が省略されるのは、注意を喚起したり、静まらせるなど、急を要する場面で起きることが多く、形容詞だけで誤解なく通じるためであると思われる。

表10 口語での使用頻度が高く教科書に今後記載すべき口語英文法類型20項目

No.	CEG Features	口語英文法	Examples
CEG5	Ellipsis of <i>Be</i> in a Command	命令文 <i>be</i> 動詞省略	Careful. / Quiet! / Silent!
CEG9	Ellipsis of Infinitive	不定詞省略	Go get him.
CEG12	Ellipsis of <i>have/had</i>	<i>have/had</i> 省略	You better go now.
CEG14	Abbreviations	略語	'cause / cuz /cos
CEG18	Coalescent Assimilation	一体同化	wanna / gonna / gotta
CEG19	Attaching <i>you</i>	人称代名詞挿入	Don't you do that. / Now you go home.
CEG20	Attention-Getting Signals	注意喚起語句	Guess what? / You know what?
CEG21	Reaction Signals	反応語句	No way! / Oh, really?
CEG22	Discourse Markers	談話標識	you know / I mean
CEG23	Tags	付加詞	something [things / stuff] like that / huh? / or what?
CEG24	-'ve /-'s/ got (to)	-'ve /-'s/ got (to)	I've got to go. / You got the money?
CEG25	Phrasal Verbs	群動詞化	Take a look at the photo.
CEG29	Communication Strategies	意思伝達方略	How can I get to the fish zoo?
CEG30	Colloquialism	口語語彙	a bunch of / a little bit / you guys / How come?
CEG31	Frequent Use of <i>get</i>	<i>get</i> 多用	Do you get it? / I got it.
CEG36	Past Tense for Perfect	完了過去形代用	Did you ever see it? / I never went back.
CEG45	Post Positioning	後置	He's coming, I think. / She's rich, I guess.
CEG46	Left Dislocation	左方転位	My father, he wouldn't say that.
CEG48	Post-W/H-Word Interrogative	後置疑問詞文	You went to Taiwan and ate what?
CEG50	Parataxis	並列結合	I was scared. I ran away. / I ran away. I was scared.

5-2. 不定詞の省略 (CEG9)

日常の会話では英語の母語話者は、I'll go check it. のように「go / come + 原型動詞」のパターンでの不定詞の to を省略して話すことが多い。ただし、I'll go and check it. の接続詞 and を省略した結果、二つの原型動詞が隣接したと解釈することも可能である。綿貫&ピーターセン (2006) は、to を省略するか否かは、リズムの関係もあると指摘しているが、過去時制ではこの省略は起きないことを学習者に教える必要がある：例) * I went get him.

複数の英語母語話者への聞き取り調査や洋面と TV ドラマの台詞のデータベースサイトである SUBZIN (<http://www.subzin.com>) での検索の結果から go to check (48 作品中 49 使用例) や go and check (369 作品中 409 使用例) よりも go check (1,176 作品中 1,371 使用例) のほうが口語でははるかに使用頻度が高いことがわかるが、今回の調査では一例も記載がなかった。

5-3. have/had の省略 (CEG12)

現在完了形で使われる have は、口語では You (have) gone to sleep under there? (*Bird on a Wire*, 1990) のように省略されることがある。had の省略は had better のフレーズで起きることが多く、同様の聞き取り調査と SUBZIN での You had better go. (34 作品中 35 使用例) と You better go. (732 作品中 823 使用例) および I had better go. (15 作品中 15 使用例) と I better go. (504 作品中 544 使用例) の検索結果から You had better ____ よりも You better ____ のほうが口語でははるかに使用頻度が高いことがわかる。いずれの省略も今回の調査では一例も確認できなかったが、構文としてよりも You better go now. のような定型表現として語彙項目として紹介し、対話文に盛り込むべきである。

5-4. 略語 (CEG14)

英語では、単語の短縮は U.S.A. のような頭字語 (acronym) の場合が圧倒的に多いが、日本語のように単語の一部(形態素)を落として短くする exam / math / photo / auto などの略語の例も若干ある。中でも、使用頻度が高い接続詞 because の短縮形である 'cause またはさらに短縮した cuz または cos (発音は同じ /kəz/) は検定済教科書にはまったく記載がなかった。いずれも弱音で発音される。'cause は洋画のスク립トや DVD の英語字幕やテレビドラマの英語キャプションや洋楽の歌詞ではアポストロフィが省略され、一般動詞の cause と表記上は区別が付かなくなることがある。教科書での記載を待つまでもなく、教育の現場では、cuz/cos のように発音されていても、because と書かれている事実を口頭でも学習者に伝えるべきである。

5-5. 一体 (相互) 同化 (CEG18)

隣接する前後双方の音が互いに作用して新たな音が生まれた結果、音節の数が減る一体同化は、日本語の「ではない」が「じゃない」と自然に変化するように、英語の母語話者の間で頻繁に起きている。英語では、wanna (=

want to) / gonna (= going to) / gotta (= got to) / gimme (= give me) / hafta (= have to) / kinda (= kind of) / outta (= out of) / whatta (= what are)が会話でよく聞かれる。wanna / gonna / gotta のつづりは現代の洋画の台詞や洋画の歌詞にもこのままで使用されることが多いが、1960年代のThe Beatlesの名曲I Want to Hold Your Handは、wanna /wʌnə/と発音されているにも拘わらず、曲名も歌詞も want to と表記されている。

5-6. 人称代名詞の挿入 (CEG19)

口語では二人称代名詞の you が命令文で動詞の前に挿入されることが多い。以下の洋画の台詞にあるように、肯定でも否定の命令文でも起きる現象で、より相手への親しみ、または、逆に「おまえ (なんて)」「この野郎」に近い非難、軽蔑、恫喝を表す。

[1] Now you go home. (Contact, 1997)

[2] You go to the hell. (Bagdad Cafe, 1987)

[3] Don't you say your good-byes. (Titanic, 1997)

教授法の影響で命令文は「原形動詞」または「Don't+原形動詞」の形態を取るものと刷り込まれている学習者は、表層的に第1例文が通常の平序文であり、「いまお前は行く」とただ単に今後の予定など相手の行動を客観的に記述しているとしか解釈できないだろう。[3]については、否定命令文ではなく、否定疑問文と捉え、「(どうして) さよならは言わないの?」と逆に別れるように急かしていると解釈してしまうかも知れない。

否定の Don't you say your good-byes. の you の挿入は比較的理解しやすいが、肯定の Now you go home. の you は挿入ではなく、Now you will go home. の will が省略された形態であると解釈することも可能であるかも知れないが、You will go. のような命令調で話す場合には、will に強勢があるはずで、省略されるとは考えにくい。また、Be good. (元気でね) は、You

will be good. とは言い換えず、You be good, baby. (*Eyes Wide Shut*, 1999) と言う例から明らかのように、you の挿入であると考えerのほうが合理的である。

5-7. 注意喚起語句 (CEG20)

日常会話では相手の注意を惹き付けるためにさまざまな言葉が使用される。注意喚起語句がいかに大切であることを学習者に認識させる必要がある。Excuse me. だけでなく、話しかける相手や状況に応じて使い分けられるフレーズが他にも豊富にある。本研究では、一部の教科書で Look. / Guess what. の記載例があったが、You see. / See. / You know. / You know what? / Listen. など日常英会話の中で非常に使用頻度の高い項目を円滑な対話のインターアクションを維持するためにも積極的に記載すべきである。また、教室での教師への呼びかけは、Teacher. ではなく、Sir. / Ma'am / Professor などが適切であり、英語圏で旅行した際に必要な警察官への呼びかけである Officer などとも是非教えるべきである。

5-8. 反応語句 (CEG21)

聞き手が話し手の発言に無言でうなずいたり、首を横に振ったり、驚いた顔をしたり、さまざまな肉体的な反応を示す。本研究では、Huh? / Gosh! / So what? / No kidding! / Are you kidding? などの従来の教科書では記載のなかった日常の会話では頻発する反応語句が確認された。しかし、Oh, no! / Oh, dear. / Oh, really? / No way! / Ooh. / Gee. / Oh, my gosh! / Oh, my goodness! / Oops. / Whoops. / Oh, shoot! / Yuck! / Ouch! / That (It) hurts. などの高い使用頻度の表現をもっと盛り込み対話者の息遣いが聞こえるような生き生きとした対話を記載すべきである。

5-9. 談話標識 (CEG22)

you know の記載が皆無、I mean の記載が一例であることは前述したが、

こうした談話標識は、教科書に是非記載すべきである。テレビやネット、洋楽や洋画で生の英語に触れる機会が多い現在の英語学習者は、来日した映画スターや試合後のアスリートのインタビューを聞けば、you know がいかに頻繁に使用されているかに気づき、学校ではまったく触れないことに疑問を抱くであろう。また、同様に身近なフレーズである I mean という高使用頻度語句がわずか 1 冊の教科書にしか記載されていないのは、あまりにも現実からの乖離が甚だしい。

5-10. 付加詞 (CEG23)

日本の中学校では is it? / isn't it? / are you? / aren't you? / do you? / don't you? / can you? / can't you? などの文法的付加詞が教えられているが、日本語の助詞のように、多彩で機能的であり、対話での意味のやりとりをスムーズに運ぶために不可欠である。

本研究では、もっとも使用頻度の高い付加詞のひとつである right? の 5 つの記載例が異なる教科書で確認できたが、類するものとして同様に使用頻度の高い correct? / okay? / huh? が付加詞として記載される例は皆無であった(反応語句としての Huh? の記載例は複数確認された)。また、文語である and so on / and so forth / etc の代わりに、口語で多用される something like that / things like that / stuff like that の 3 つの記載が今後強く望まれる。

5-11. -'ve [-'s] got (to) (CEG24)

have to は口語で have got to で代用されるがたいていは短縮され、-'ve got to となり、さらに -'ve が省略され got to となり、最終的に隣接音が一体同化し gotta になる。一般にインフォーマルな響きがあるとされているが、口語での使用頻度は非常に高いにも拘わらず、教科書に記載されることは皆無である。Jespersen (1964) は、have が助動詞 (auxiliary verb) として使われる頻度が増えるにつれて、本来の所有を表す意味が話者には弱く感じられるようになり、強化するために have got の形が使われるようになったと解説

している。しかし、のちに完了の意味が失われ、現在形の have と同じく所有を表すものと認識され、それが have to のほうにも使われるようになったという。Carter & McCarthy (2006) は、-’ve got to は会話ではイギリス英語のほうがアメリカ英語よりも約 50% 使用頻度が高いと指摘している。

5-12. 群動詞化 (CEG25)

口語では、look や rest のように名詞の形が同じ動詞は、Let’s look at のように単一の動詞を用いる代わりに、「have [take]+a [an]+名詞」や「have [take]+a [an]+形容詞+名詞」の群動詞の形態が使われることが多い。単独での動詞と群動詞では意味的な差異はほとんどないが、モード（語調）が若干異なり、単独のほうがよりフォーマルである。また、表現上、動詞の意味を修飾する際に、本来副詞(句)を付けて Look at ___ closely. と表すよりも、形容詞(句)を名詞の前に付けて Take a close look at ___. と言ったほうが簡潔であり、また決まり文句として定着しているものが多い。今回の調査では、“Take a look at the pictures below.” (MY WAY English Communication I、三省堂) の一例だけ確認できたが、今後もっと多く記載すべきである。

5-13. 意思伝達方略 (CEG29)

特定の言葉を失念したり、適切な言葉が思い浮かばず、記述したり、似た言葉で代用する経験は、母語においても頻繁に起きる現象であり、総じて意思伝達方略 (Communication Strategies) と呼ばれる。外国語のアウトプットの段階で、語彙的な困難さに直面した時に、何とか自分の言い表したいことを相手に伝えようとして用いられる手法を Faerch & Kasper (1983) は達成方略 (Achievement Strategies)、反対に回避 (Avoidance) したり言い始めてから途中で破棄 (Message Avoidance) するのを減退方略 (Reduction Strategies) と命名した。いずれも、日常頻繁に起きる状況であるが、今回の調査では想定されておらず、コミュニケーションの現実との乖離があると言

える。意思伝達方略は、ほとんどの教科書で扱われることはないが、教科書で章を設けて扱うだけの有用性は十分ある。

5-14. 口語語彙 (CEG30)

文語ではまず使われないインフォーマルな響きがあると母語話者が直観的に感じるのが口語語彙であるが、中でも使用頻度が高い Hey. が中学校の教科書で初めて記載されたことは特記すべきである。しかし、a bunch of / a little bit / you guys などの高使用頻度の口語フレーズの記載が今回の調査では皆無であった。いずれも親しい間柄でよく使用される日常会話フレーズとして今後記載すべきである。

5-15. get の多用 (CEG31)

get を含む動詞句(群動詞)は口語で非常によく使われており、松本(1983)は「英会話に強くなる秘訣は、英語のロジックを身につけることであり、その第一歩は give と get を学ぶことである」(p.3)と述べている。特に、understand という意味での使用頻度が非常に高いが、今回の調査では、I get it. (ONE WORLD English Course 2、東京書籍)と I got it. (JOYFUL Communication English Basic、三友社)の二例の記載しかなく、今後より多くの教科書での記載が望まれる。

5-16. 現在・過去完了を過去形で代用 (CEG36)

口語では、過去の経験を現在完了の代わりに、Did you ever see this girl? (*Blade Runner*, 1982) や I never went back. (*Amistad*, 1997) のように、過去形に ever や never と添えて言い表すことがある。綿貫&ピーターセン(2006)は、これはくだけた表現として、とりわけ子供の間で使われていると解説している。同様に、本来過去完了を使うところを、We didn't get any more than we expected, old man. (*The Magnificent Seven*, 1960) や I knew you'd be nice, but Adam was better than I thought. (*Harry's Law*, 2011)

のように単に過去形で表すことがある。完了形に先行して、過去形の学習時に経験を表す用法を教え、早い時期から過去の経験を語れるように指導すべきである。

5-17. 後置 (CEG45)

特定の内容に対する話者の推量や確信を表す I think / I guess / I believe / I suppose / I bet などは文頭だけでなく、挿入句として、文中、文尾に自由に置けることを学習者に認識させる必要がある。強調したい要素が文頭に置かれる傾向にあるため、I think のような発話者の推量を表す語句が置かれる位置が文頭に近いほど、総じて推量の度合いが高まり、結果として断定の度合いが弱まる傾向がある。本研究では、後置は Well ... about fifteen minutes, I guess. (HELLO THERE! English Conversation, Tokyo Shoseki) の一例のみであり、今後教科書の対話文中に積極的に含めると同時に、どの位置でどのようなニュアンスの違いが出るかを解説すべきである。

5-18. 左方転位 (CEG46)

口頭の会話においては、All the other civilizations that you find, they come here? (*Contact*, 1997) のように、主部を言い切ってから、少しポーズを置いて、その主部を受ける代名詞を使って完全なセンテンスを発する左方転位がよく使われているが、本研究での記載例は皆無であった。左方転位は、主部が長過ぎると、主部の終わり目が不明瞭だったり、聞き手は先に話された部分を忘れてしまう懸念を話者が持った時に発生することが多いが、This guy, Flash Thompson, he probably deserved what happened. (*Spiderman*, 2002) や My army and the Khambas, they fight with almost nothing. (*Kundun*, 1997) のような短い主部でも、際立たせたり、一息入れて改まって話す時などにも起きることがある。また、Roy and Rex, naturally, I suppose they're in it. (*Lolita*, 1962) のように、隣接しない場合もある。

英語の left dislocation という言葉は何か間違った位置に語を並べたよう

な響きがあるとし、Carter & McCarthy (2006) は “header”、Biber et al. (1999) は “noun phrase preface” と呼称し、Leech (2007) は dislocation という用語自体が文法学者が文語に偏重し口語を軽んじている証であると述べている。相手が聞き漏らさずにしっかりと聞き取ってもらうためにも有効な用法として、教科書に記載すべきである。

5-19. 後置疑問詞文 (CEG48)

文尾に疑問詞を置いたまま質問する形式には二種類ある。ひとつは、相手の発話をこだまのように繰り返す「エコー疑問文=echo-question」である：

- (1) A: I ate sushi. B: You ate what? A: I ate sushi.
 (2) A: What did you eat? B: What did I eat? I ate sushi.

(1)の形態で質問すれば、相手の発話の途中でもタイミングよく割り込んで不明点を解明したり確認できる合理的な形式と言える。また、(2)は形式的にはエコー疑問文の一種であるが、機能的には、驚きや確認のためのあいづちであり、反応語句として分類するほうが適切である。(2)の形態は、既に指摘したように中学校の教科書では記載が多く、New Crown English Series 1 (三省堂) では、Lesson 3 の段階で早くも、Paul: Excuse me. Where is the toilet? Clerk: It's under the stairs. Paul: Under the stairs? Clerk: That's right. (p.41) の対話にあるように使われている。

もうひとつのタイプは、以下の対話文にあるように、相手の発話を受けた応答文で使われるのではなく、口火を切った話者のほうが語順を変えずに疑問点の部分だけを適切な疑問詞に変える用法であり、八木 (2002) は「文末疑問動疑問文=SFWI: sentence-final wh-word interrogative」と呼称することを提言している。

- (3) A: You went to Otaru and ate what? B: I ate sushi.

両者とも隣接ペアの最初の発話であろうと応答文であろうと、使われるテキストが異なっても、形態そのものは同じであるので、小林(2013)は、総じて「後置疑問詞文=PWI: post-wh-word interrogative」と呼称することを提案している。この形態は、円滑な対話を促進する用法として、授業でペアワーク等で十分な口頭演習を行うべきである。

5-20. 並列結合 (CEG50)

口語では、because などの事実の前後関係を明確に示す接続詞を用いず、so/and/but 等の節同士を緩やかに結び付ける接続詞を使うか、または接続詞を一切使わずに淡々と節を並べる並列結合 (Parataxis) が多い。他方、論文などの緻密な論旨の展開が期待される英文では、緩やかな節間の接続は原稿の推敲や添削の段階で、because や therefore などの接続詞を用いて節間の結び付きや論理関係を明示した従属結合 (Hypotaxis) の文体に書き直され、いわゆる「引き締まった文章」に仕上げられることが多い。まとめると以下のように整理できる：

従属接合 : I ran away because I was scared.

並列接合 : I ran away, so [and] I ran away. / I was scared. I ran away. /
I ran away. I was scared.

節間の接続に注意をする余りに、話の流れや流暢さが損なわれないように、思い付いた発話のチャンクや節を即時にそのまま発話するように指導することも必要である。

6. 結論

本研究では、7種25冊の中高の教科書から50中24の口語英文法類型項目のみが特定され、中高生はオーセンティックな英語の形態の半分も習う機会

がない現状が判明した。しかし、現実には、1冊の教科書にしか記載がないものがあることを考慮すると、事態はより憂慮すべきである。

本研究において、語彙のレベルにおいては、What's up? と Hey. も中学校の教科書に記載されるなど、日常英会話での使用頻度の高い定型表現の重要性が認識されてきたようだ。しかし、you know や I mean ほどの口語で高頻度で使用される有用なフレーズの記載がほとんどないなど、問題点も多い。

統語のレベルでは、主部省略が比較的多く盛り込まれているなど、英語の使用実態に近づいたものの、英語の母語話者が日常多用し、かつ記載しても教育上問題がないと思われる後置、左方転位、後置疑問詞文、並列結合などの有用性が教科書執筆者の間でもっと認識され、記載されることが強く望まれる。

2014年度には、コミュニケーション英語IIと英語表現II、さらに2015年度には、コミュニケーション英語IIIが教室で使用される予定であるが、少しでも多くの口語英文法類型項目の記載が増えることが望まれる。そのためには、2年後にすべての新教科書が全部揃うのを待つのではなく、本研究の結果を現在執筆中の教科書の著者に届け、改善を求めることが学習者の利にかなうと考える。

昭和期における、著者の世代に、Hello. は教科書に記載されていても、Hi. は記載されていなかったことから、これまで日本の英語学習者がいかに現実の生きた英語の口語表現を学ぶ機会を逸してきたかがわかる。その結果、市販の英会話本などの英語学習書が公的な学校の英語教育を批判する形で実用性とオーセンティシティをアピールし、出版されてきた事実も納得できる。

最後に、これまででは、口語英語の特徴が伝統的な文法項目との関連で整理され提示されたことが少なく、口語表現のオーセンティシティを検証する談話分析ツールがなかったが、口語英文法類型フレームワークを活用することで、今後特定の教科書や教材、またはその他のテキストのオーセンティシティの測定が可能になると期待され、教科書の適正化への一助となると信じている。

7. 教科書適正化へ向けた 5 つの提言

筆者は、過去 20 年余り、日本の大学の英語教科書と一般向けの英語学習書の執筆を手掛けてきた経験上、教材の作成の過程や出版社とのやりとりや読者の指摘に対して対応するなど、教材作りの現場に関与してきたが、中高の英語教科書を執筆したことがない。ゆえに、現行の検定教科書の問題点について、部外者の立場から、問題を指摘したいが指摘する機会のない現場の教員を代弁する意味も含めて、教科書の適正化へ向けて以下の 5 点の緊急提言させていただきたい。

提言 1：教科書として教育的目的のために事実を捻じ曲げてはならない

教科書作りは、その構成も大切であるが、何よりも記載する英文の選択が最初の課題であり、いかに適切な素材を選び記載するか、または執筆するのか慎重な判断が求められる。それには語彙統語レベルや内容やタスクの選択などの教授法上の考慮だけでなく、英文のオーセンティシティも考慮しなくてはならない。散文やエッセイと異なり、対話文で使用される発話については、レジスターや使用頻度などの現実の英語の実態を正確に反映したものでなければならない。教育的配慮を重んじ過ぎるばかりに、口語英文法を軽んじ、学習者の理解のしやすさや、教えやすさを重視するあまり、過度に単純化し、現実との整合性に欠ける言語材料や解説・指導をするのは適切ではない。代わりに、よりオーセンティックな日常会話表現や文法構造を体系的に教科書に盛り込み、指導すべきである。口語英語に関して、教科書の英語と現実との乖離性が明らかになった今、次なる課題は、乖離の原因を解明し、改善に向けて働きかけることが筆者の使命である。

提言 2：執筆者全員が口語英文法を理解する

高い使用頻度で、教育上問題がないと思われる多くの口語フレーズの記載がない理由の最大たるものは、文科省検定教科書の執筆者（現役の中学、高

校、大学教員、英語母語話者)の間で口語英語の実態に関する正確な知識が十分共有されていないことが原因であると考えられる。教科書の本質上、上品でどこで使っても誤解を招くことがない、教養ある言語材料を厳選することは当然である。しかし、教育的適正に合致した日常の会話の中で多用される How come? や左方転位など語彙、構文、談話構造の大半が学習者が学習の機会を逸していることは、極めて不適切である。

ネット等を通じてオーセンティックな英語に簡単に接することが可能になっている現在において、教室で教えられる英語と現実の英語が乖離している事実を学習者が目の当たりにすれば、学校の授業そのものに対する信頼と期待を失い、学習のモチベーションにも悪影響が出るだろう。「学校や塾で受験英語、英会話学校で生の英語」のような歪な図式をそのまま放置しておいてはならない。

ゆえに、口語英文法に精通した言語学者を教科書執筆者の代表とし、現在の英語の実態を正確に把握し、それを教材に反映させるための研究会や勉強会を行い、口語英文法の知識を完全に共有することが望ましい。さらに、コーパス言語学に精通し、高度の英語の運用能力を有し、英語圏での生活や滞在経験があり、教科書で設定される対話場面などを実際に自ら経験したことがあるなどの諸条件を満たした人物を執筆の全員またはある一定の割合で含めることを検定の条件に加えるべきである。

提言3：現場の教員からのフィードバックを重視する

教科書は、その内容や使いやすさなど、実際に現場で何度もその教科書を使用した現場の教員からのフィードバックを尊重し改善を繰り返すことが何よりも必要である。一般の英語学習書であれば、使用中に不満があれば使用をやめれば済むが、教科書は学期途中で不備が見つかって、出版社に現場の教員が連絡して確認が取れても、全国の教員の間で即時に共有されるとは限らない。次の改訂まで待つか、その取扱いを出版社の誠意に任せるしかない。ALT から不自然な表現の指摘があれば、現場の教員は出版社に直接メール

または電話で問い合わせ、出版社は担当の執筆者に即時連絡し、事実の確認を行うべきである。できれば、教科書を日々使用している現場の中高の教員が執筆者に直接メール等で問い合わせる仕組み、または出版社がそれを取り次ぐサービスがあることが望ましい。

提言 4：執筆者全体の 50%を英語母語話者にする

昭和期には、数名の日本人の執筆者と共に一名の英語母語話者が英文校正担当者として教科書に氏名が記載されることが多かったが、今回の調査では、そのような英文校正担当者という名称はなく、英語の母語話者と思われるローマ字表記や氏名の一部にカタカタを含んだ執筆者が名を連ねている。また、教科書によっても英語母語話者の執筆者の比率は異なり、中学校の教科書だけであるが、以下のような執筆者の構成となっている：Sunshine 1, 2, 3：執筆者 30 名中、英語母語話者 3 名(10.0%) / New Crown English Series 1, 2, 3：執筆者 30 名中、英語母語話者 2 名 (6.7%) / New Horizon English Course 1, 2, 3：執筆者 36 名中、英語母語話者 4 名 (11.1%) / One World English Course 1, 2, 3：執筆者 17 名中、英語母語話者 2 名 (11.8%) これは少ないように思われるが、実際には、日本語母語話者の執筆者がそれぞれ身近な英語母語話者からのチェックを受けた上で担当ページを持ち寄って執筆する場合もある、しかし、それではオーセンティシティの検証としては不十分であると言わざるを得ない。

少数の特定の地域や年齢層の英語母語話者の見解には慎重を期さなければならぬ。著者の英作文の英語母語話者と日本語母語話者による添削の質的量的違いに関する実証研究 (Kobayashi, 1992) でも、母語話者間での見解の違いが相当大きいことが判明している。しかし、特定の日常会話のフレーズの使い方や日常での使用頻度に関しては、大きく意見が分かれることが多い (小林&クランキー、2009 参照)。ゆえに、単に、英語母語話者を執筆者の一人に形式的に母語話者を羅列するのではなく、性別と年齢層が異なるアメリカ人、カナダ人、オーストラリア人、イギリス人をそれぞれ複数執筆者また

英文校正担当者として入れることを検定合格の条件として定めるべきである。

特定の地域や学校で使用する教科書と異なり、全国で一定の期間使用される教科書の影響はあまりにも大きいので、出版社と執筆者のチーフは、執筆者の選抜には各人の業績や英語力も十分考慮した上で行っていただきたい。

提言5：口語英文法の研究や教科書分析を活性化する

文科省は、英語の教科書に記載される口語体の英文のオーセンティシティの重要性を認識し、各教科書の特徴や採用実績、さらに現場の教員の評判、さらに実証研究の結果などを積極的に公表し、さらに現場の教員や言語学、応用言語、英語教育学、等の専門家による調査や研究を促進するために、科研費の重点研究項目として認定すべきである。

これまでの語彙表現に関する研究は、JACET8000 (2013) など個々の単語の使用頻度やレベル分けに関するものは多くあるが、熟語や定型表現に関するものは少ない。そのため、現場の教員は *have* や *opportunity* のような特定の語が中学か高校のレベルであるかは判断できるが、*What's going on?* や *How come?* をどの時期に教えるのが適切であるか判断に苦しむ。

多くの英語教育関係者が、教科書の英文表現のオーセンティシティにもっと目を向け、研究を進めることで、教科書執筆者と出版社に緊張感が生まれ、いまある教科書間での競争を高め、淘汰を促進し、教科書としての体裁だけでなく、記載された口語表現のオーセンティシティが信頼できる教科書だけを検定に合格させる必要がある。

以上の提言が即時実行され、日本の英語学習者のみならず世界中の英語学習者がオーセンティックな口語英語を学ぶ機会を逸するようなことが、これ以上続かないことを願う。英語学習者が、洋楽、洋画、メディアや個人の口頭の直接対話、メール、ツイッター、ブログ、フェイスブック、スカイプなどのカジュアル場面での英語でのコミュニケーションを行った際に教科書と

の乖離に気付き、戸惑うことがないように、そして教室の英語の信頼を失わないように、教育上問題がない限り、使用頻度が高く、機能的で有用性が高い日常の語彙構文談話の特徴を少しでも多く記載することが望まれる。その前提として、最終的なチェック機関としての文科省の教科書検定官自身が口語英文法の知識を有していることが大前提である。また、2020年の東京オリンピック開催を控え、巷にあふれ、通りや宿泊施設等で野ざらし状態の文法ミス(例: *Don't Slippers*.—東京都内ビジネスホテル客室)などの不適切な英語表記の管理責任を含め、日本の英語教育の最終責任者は日本国政府文部科学省であることは自明の公である。

英文引用文献

- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Carter, R. & M. McCarthy. (2006). *A Comprehensive Guide: Spoken and Written English Grammar and Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cullen, R. & I. Kuo. (2007). Spoken grammar and ELT course materials: a missing link? *TESOL Quarterly*, 41(2), 361-386.
- Faerch, C and G. Kasper. (1983). Plans and strategies in foreign language communication. In Faerch and Kasper (eds.), *Strategies in Interlanguage Communication*, 21-60. London: Longman.
- Harmer, J. (1991). *The Practice of English Language Teaching: New Edition*. London: Longman.
- Jespersen, O. (1964). *Essentials of English Grammar*. Alabama: The University of Alabama Press.
- Kobayashi, T. (2008). Giving shape to pedagogically downgraded spoken English grammar through quantitative representation. *Otaru University of Commerce, The Review of Liberal Arts*, 115, 99-132.
- Kobayashi, T. (1992). Native and nonnative reactions to ESL compositions. *TESOL Quarterly*, 26(1), 81-112.
- Kochi, N. (2013). The treatment of the contact-clause as an index to changing trends in grammar teaching reflected in junior high school English textbooks in Japan. 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻 言語情報科学 11, 123-139.
- Leech, G. (1998). Language learning and computers English grammar in conversation. Retrieved November 4, 2007, from <http://www.tuchemnitz.de/phil/english/chairs/linguist/realindependent/llc/Conference1998/Papers/Leech/>

- Leech.htm
Longman Dictionary of American English. (1983). London: Longman.
 Morrow, K. (1977). Authentic texts in ESP. In S. Holden (Ed.), *English for Specific Purposes*. London: Modern English Publishers.
 Nunan, D. (1993). *Introducing Discourse Analysis*. London: The Penguin Group.
 Porter, D. & J. Roberts. (1981). Authentic listening activities' in Michael H. Long & Jack C. Richards (eds.), *Methodology in TESOL- A Book of Readings*. Newbury House, 177-187.
 Richards, J. & R. Schmidt. (2002). *Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics: 3rd Edition*. London: Longman.
 Swan, M. (2005). *Practical English Usage: 3rd Edition*. Oxford: Oxford University Press.
 Wada, J & H. Sasaki (2012). An analysis of junior high school textbooks of English in terms of rhetorical organization.中部地区英語教育学会紀要(41), 139-146.
 Wilkins, A. (1976). *Notional Syllabuses*. Oxford: Oxford University Press.

和文引用文献

- 安達励人&長谷川勝一(2001)「英語の授業で使う映画選択のための一尺度：高校英語教科書から見た語彙レベルの利用について」映画英語教育学会映画英語教育研究第6号、3-17。
 石川有香(2004)「各種ガイドラインおよび高校英語教科書に見る敬称の問題」神戸女学院大学女性学評論18号、39-57。
 井出裕美(2011)「英語教育法(3)日本の英語教育：その原点：明治初期 英語検定教科書以前の教科書の分析と検討」太成学院大学紀要13号、9-19。
 印田佐知子(2012)「中学英語教科書における異文化コミュニケーション能力育成の課題：執筆者への聞き取り調査に基づく」聖学院大学総合研究所紀要48号、257-293。
 牛江一裕(2013)「中学校英語教科書における文法記述と語彙導入の問題点：Sunshine English Courseの場合」埼玉大学紀要62号(1)、175-190。
 江利川春雄(2012)「会話中心で英語学力が低下(英語教科書を考える)」中央教育研究所 教科書フォーラム：中研紀要10号、68-70。
 大澤美穂子(2010)「文科省検定英語教科書における題材の練習問題に関する研究——中学校英語教育を中心に」桜美林大学言語教育研究創刊号、43-53。
 大東真理(2003)「新学習指導要領に基づく中学校英語教科書について」大東文化大学語学教育研究論叢20号、139-158。
 岡野哲、吉田翠、早坂慶子、尾田智彦、小林敏彦(2000)「高等学校用「オーラル・コミュニケーションA」教科書における依頼表現の特徴——談話分析の視点から」北海学園大学学園論集第103号、35-75。
 金田尚子(2005)「日本の中学校英語教科書にみる異文化理解：題材の観点からの教

- 科書分析」龍谷大学英語英米文学研究 33 号、129-149.
- 鹿野敬文 (2000) 「高校英語教科書における人権・差別問題の扱い方の特徴」日本教科教育学会誌 23 号(2)、65-74.
- 鹿野敬文 (2002) 「日本の高校英語教科書における地球環境問題の扱い方」日本教科教育学会誌 25 号(1)、71-80.
- 杉浦千早 (2005) 「高校英語教科書語彙リストの作成と使用語彙の検討」外国語教育メディア学会 Language Education & Technology 39 号、117-136.
- 鈴木卓 (2005) 「中学校英語教科書におけるジェンダー・バイアス：機能文法を用いた分析」フェリス女学院大学文学部紀要 40 号、19-28.
- 小林敏彦&クランキー、S.M.(2009) 『日本語から引けるネイティブがよく使う英会話表現ランキング』東京：語研
- 小林敏彦 (2009) 『洋画の談話に見られる口語文法の構築と類型化』小樽商科大学人文研究第 118 号、99-114.
- 小林敏彦 (2010) 『すべての英語教師・学習者に知ってもらいたい口語英文法の実態』小樽：小樽商科大学出版会
- 小林敏彦 (2013) 『図解 50 の法則口語英文法入門』名古屋：フォーイン・スクリーンプレイ事業部
- 島田洋子 (2005) 「新しい中学英語教科書の描く男性像」京都学園大学人間文化学会紀要 16 号、19-20.
- 大学英語教育学会基本語改訂委員会 (2003) 『大学英語教育学会基本語リスト JACET List of 8000 Basic Words』東京：大学英語教育学会
- 大東真理 (2003) 「新学習指導要領に基づく中学校英語教科書について」大東文化大学語学教育研究論叢 20 号、139-158.
- 田川憲二郎 (2008) 「be 動詞の誤用と初学時の導入順序」神田外語大学 Scientific Approaches to Language 7、269-288.
- 橘広司 (2010) 「日本人における「苗字の重視」と英語教科書に見る呼称の問題」桜美林大学言語教育研究創刊号、67-78.
- 中條清美、長谷川修治、古森智大、西垣知佳子 (2007) 「1980 年代と 2000 年代の高校英語教科書語彙の比較分析 (小中高大を見通した大学英語教育——一貫したカリキュラムを求めて)」JACET 全国大会要綱 46 号、186-187.
- ハリデー、M.A.K. (2001) 『機能文法概説』(山口登・笈壽雄訳) 東京：くろしお出版
- 松本道弘 (1983) 『GIVE GET 辞典』東京：朝日出版社
- 文部科学省中学校学習指導要領解説外国語編・英語編 (2009)
- 文部科学省高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編 (2009)
- 横山幸一 (2012) 「コミュニケーション英語 I：文部科学省検定済新英語教科書案内」群馬高専研究第 31 号、31-42.
- 吉野康子 (2009) 「高校英語教科書における言語の使用場面の扱い——学習指導要綱(外国語)を中心に」実践女子大学 FLC ジャーナル 4 号、49-64.
- 八木克正 (2002) 「口語英語の文法特徴：LKL Corpus を使って(1)」関西学院大学言語と文化—語言与文化 5 号、1-16.
- 山田雄一郎 (2004) 「中学校英語教科書の分析と批判」広島修道大論集人文編 45 号(1)、149-203.
- 綿貫陽&M・ピーターセン(2006) 『表現のための実践ロイヤル英文法』東京：旺文社

参考サイト

English Language & Usage

<http://english.stackexchange.com/questions/79666/take-a-look-at-vs-look-at>

SIBZIN

<http://www.subzin.com/>

付録 1 平成 25 年度新カリキュラムの概要
中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編 2

第 9 節 外国語

第 2 各言語の目標及び内容等

英語

2 内容 (p.92-p.93)

(1) 言語活動

英語を理解し、英語で表現できる実践的な運用能力を養うため、次の言語活動を 3 学年間通して行わせる。

ア 聞くこと 主として次の事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。
- (イ) 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、情報を正確に聞き取ること。
- (ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。
- (エ) 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。
- (オ) まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。

イ 話すこと 主として次の事項について指導する。

- (ア) 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく発音すること。
- (イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること。
- (エ) つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。
- (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

ウ 読むこと 主として次の事項について指導する。

- (ア) 文字や符号を識別し、正しく読むこと。
- (イ) 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読すること。
- (ウ) 物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること。
- (エ) 伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること。
- (オ) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。

エ 書くこと 主として次の事項について指導する。

- (ア) 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。
- (イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。
- (エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。
- (オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

3 指導計画の作成と内容の取扱い (p.98)

- (2) 教材は、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化や自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。

ア 多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ 外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

付録2 平成25年度新カリキュラムの概要
高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編

四つの領域の言語活動の統合を図るとともに、発信力の向上や、中学校との円滑な接続を図る観点から、科目の構成及び内容等を次のように改善する。(p.3-4)

- (ア) 「コミュニケーション英語基礎」は、身近な場面や題材に関する内容を扱い、日常的な事柄についてコミュニケーションを図る活動等を行うことを通して4技能を総合的に育成することにより、高等学校での学習に円滑に移行させることをねらいとして内容を構成する。
- (イ) 「コミュニケーション英語Ⅰ」は、4技能を総合的に育成することをねらいとして内容を構成し、統合的な活動が行われるようにするとともに、そうした活動に適した題材や内容を扱うこととする。その際、例えば、社会科や理科など他教科で学習する内容、自国や郷土の風俗・習慣、歴史、その他の様々な伝統や文化に関する内容、発明や発見などの科学技術や自然に関する内容、異文化コミュニケーションに関する内容等、コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成にも資する題材や内容を選択的に取り上げ、体系立てて扱うものとする。
- (ロ) 「コミュニケーション英語Ⅱ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」の基礎の上に、総合的な英語力の向上を図る指導を行うことをねらいとして内容を構成する。
- (ハ) 「コミュニケーション英語Ⅲ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」及び「コミュニケーション英語Ⅱ」の基礎の上に、総合的な英語力の向上を図る指導を行うことをねらいとして内容を構成する。
- (ニ) 「英語会話」は、身近な場面や題材に関する内容を扱い、音声を中心にコミュニケーションを図る活動等を行うことを通して、必要な情報や考えを聞いたり、話したりすることができる力の向上を図るような指導を行うことをねらいとして内容を構成する。
- (ヒ) 「英語表現Ⅰ」は、基本的な言語規則に基づいて、様々な場面に応じて適切に話すことや書くことができるようにし、あわせて論理的思考力や批判的思考力を養うことをねらいとして内容を構成する。
- (ヘ) 「英語表現Ⅱ」は、スピーチやプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなど高度なコミュニケーションを行うことができるようにすることや複雑な文構造を用いて正確に内容的なまとまりのある多様な文章が書けるようにすること、あわせて論理的思考力や批判的思考力を養うことをねらいとして内容を構成する。
- (コ) 言語活動、言語材料、教材、指導上の工夫及び配慮事項については、各科目のねらいに配慮しつつ、中学校と同様の趣旨で改善を図る。また、ICTなどを指導上有効に活用することに配慮する。
- (ク) コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、それぞれの科目において扱う題材や内容、言語材料の難易度によって分類したものであることから、「コミュニケーション英語Ⅱ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修した後に、「コミュニケーション英語Ⅲ」は「コミュニケーション英語Ⅱ」を履修した後に、履修させるようにする。

付録 3 検証に使用された中高の新英語教科書 25 冊



付録 4 談話標識
Discourse Markers by Swan (2005)

	種類	例
1	焦点化・結合 focusing and linking	speaking of; as for; as far as ... is concerned
2	反駁点の均衡化 balancing contrasting points	on the other hand; while; whereas
3	相違点の強調 emphasizing a contrast	however; nevertheless; yet; but
4	類似 similarity	similarly; in the same way; just as
5	譲歩・反論 concession and counter-argument	of course; even so; but
6	否定 contradicting	on the contrary; quite the opposite
7	前言の放棄 dismissal of previous discourse	at least; anyway; in any case
8	話題転換 change of subject	by the way; incidentally; now
9	話を戻す return to previous subject	to return to the previous point; as I was saying
10	組み立て structuring	firstly; first; first of all; to begin with; finally
11	追加 adding	moreover; in addition; besides
12	一般化 generalising	in general; broadly speaking; to some extent
13	例示 giving examples	for instance; for example; in particular
14	論理的結論 logical consequence	therefore; as a result; consequently
15	明確&詳細提示 making things clear & giving details	I mean; actually; in other words
16	軟化・修正 softening and correcting	I think; I guess; in my view
17	時間かせぎ gaining time	let me see; well; you know
18	反応 showing one's attitude to what one is saying	honestly; frankly; no doubt
19	説得 persuading	after all; look; look here
20	他者の期待への言及 referring to the other person's expectations	in fact; as a matter of fact; to tell the truth
21	要約 summing up	in conclusion; to sum up; in short